

令和 7 年度

学校推薦型選抜試験問題

地域創生学部 地域創生学科  
地域産業コース 応用情報志向枠  
小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（6 ページ）には、解答用紙（1 枚）及び下書き用紙（1 枚）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確かめ、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出して、解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄（横書き）に記入しなさい。
- 5 句読点は、1 字と数えなさい。
- 6 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

問1 この文章の内容を 400 字以内で要約しなさい。

問2 この文章の内容を踏まえ、不特定多数の人と文字だけでコミュニケーションを行う際に心がけるべきこととその理由について、あなたの意見を 400 字以内で述べなさい。

パソコン通信<sup>1)</sup>の時代から、ネットワーク上でのやりとりにはトラブルがつきものでした。その要因の一つは、それがまさに対面ではない、文字だけのコミュニケーションだったという点に求められるでしょう。

対面でのコミュニケーションの場合、その参加者にはお互いの「面目」を守ろうとする傾向があります。自分の面目を守るだけでなく、相手の面目をつぶさないように心がけるということです。相手の面目をつぶすことに躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>しないと、周囲の人びとからの評価が下がってしまうことになりかねないからです。

とはいえ、それでも意見が食い違うなどの理由で、そのままではお互いの面目を保つのが難しい状況に陥ることがあります。そこで用いられる方法の一つが「なあなあ」で済ませるというやり方です。つまり、意見が食い違っていたとしても、表面的にはなんとなく合意しているかのようにふるまうということです。

対面でのコミュニケーションでそれがやりやすいのは、記録や録音をしない限り、発せられた言葉は跡形もなく消えてしまうからです。残っていないからこそ、なんとなく意見が一致しているかのようにみせかけやすいのです。私自身、人と話をしていて「この人とは意見が合わないな」と内心では思っても、あたかも腹の底から同意しているかのようにふるまうことがときどきあります。

ところが、ネットワーク上で見ず知らずの相手とやりとりする場合、相手の面目を保たねばならないという意識はどうしても低くなります。相手を完膚なきまでに叩<sup>たた</sup>きのめすと、ギャラリーのひんしゅくを買うどころか、称賛されることも少なくありません。

しかも、文字によるコミュニケーションでは、それぞれが何を書いたのかが目

にみえるかたちで残っていますし、それぞれの主張を支える論理もより明確になりがちです。口頭では「なあなあ」で済ませられるかもしれない意見の食い違いが、文字だけのコミュニケーションではそれぞれの論理が可視的に、より明確に浮かび上がるために、落としどころがどこにも見出せなくなってしまうのです。

米国の妊娠中絶をめぐる論争が典型ですが、世の中には論理の次元ではどう頑張っても和解できない対立が存在しています。それぞれの主張を支える道徳観が根本から食い違っているからです。

そうした状況でも妥協点を探ろうとするなら、論理的、抽象的な次元での話をいったん脇に置いて、対立する双方がかりうじて我慢できるポイントを実務的、具体的に探す必要が出てきます。文字だけのコミュニケーションによって論理の次元で戦い続けたとしても、そうしたポイントに到達できる可能性はきわめて低いと言わざるをえません。

また、文字だけのコミュニケーションは、内容以外の情報がきわめて乏しいのが特徴です。相手が怒っているのか、悲しんでいるのか、別にそれほどでもないのかがわかりにくいのです（メールの顔文字は、そういった情報の乏しさを補うための手段です）。そのため、関係がいったんこじれ始めると、相手からの返信が実際以上に攻撃的なものに思える可能性が跳ね上がります。昔から「メールで喧嘩けんかになった場合、直接に会わないと仲直りできない」と言われるのですが、そのあたりに原因がありそうです。

さらには、「他人の目に入るところに意見を書く」という行為が生み出す問題もあります。世の中には自分の意見の一貫性を全く気にしない人もいますが、とりわけ人目につくところに書かれた言葉は、それを書いた人間を強く拘束しがちです。

意見を書いていなければ、または書いたとしても日記のように他人の目にさらされないところであれば、後にその意見を変えることに大きな制約はありません。ところが、人目のあるところに意見を書き、後にそれを変えることになれば、かつての自分が誤っていたことを人前で認めねばなりません。これはとりわけ、自分の意見にプライドをもつ人であればあるほど難しくなります。

したがって、最初は軽い気持ちで、あるいは「ネタ<sup>2)</sup>」として書いたことであっても、引っ込みがつかなくなることや、自分で書いた言葉を読み返すうちに

自分自身を説得してしまう可能性が生じるようになります。「自分は絶対に正しい」という理屈を次々に生み出し、それによって自らの立場を固めていくことになりうるのです。結果として、何がなんでも自分の非を認められない、「謝ったら死ぬ」状態に陥ることにもなりかねません。

人間は言葉を放つことでコミュニケーションをしています、自分の放った言葉が自身をつくりあげていく側面も存在します。ソーシャルメディア上での誹謗中傷や差別的発言がたとえ当初は「ネタ」であり、しかも匿名で発するものであっても、その発言自体が人格を蝕んでいく可能性には注意しておいたほうがよいでしょう。

津田正太郎『ネットはなぜいつも揉めているのか』（筑摩書房、2024年）

より抜粋、一部改変

（出題者注）

- 1) パソコン通信：1980年代から1990年代によく利用された会員制の通信サービス。電話回線等を利用してサービス提供事業者のシステムに接続して、会員同士でメールやチャット、掲示板等のサービスが利用できた。1990年代後半以降のインターネットの普及に伴って、徐々に利用者が減少して使われなくなった。
- 2) ネタ：ここでは、「受け狙いで書かれた、真実ではない内容や誇張した内容」という意味で使われている。



